

SHOW HEY シネマール

★★★

あしたは最高のはじまり

2016年・フランス映画
配給/KADOKAWA・117分

2017 (平成29) 年9月17日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

監督：ユーゴ・ジェラン

出演：オマール・シー／クレマン
ス・ポエジー／アントワー
ヌ・ベルトラン／グロリア・
コルストン／アシュリー・ウ
オルターズ

■■■ショートコメント■■■

◆本作の公式HPのイントロダクションは次の通りだ。

命知らずの売れっ子スタントマンとなった父親と、優秀なマネージャー代わりの娘。自由すぎる生き方の二人が、学校や撮影現場など行く先々で、とんでもない騒動を勃発させる。そんな親子を超えた常識破りの絆に、まずは本国フランスが熱狂、8週連続トップ10入りを果たす大ヒットを記録した。さらに、拍手喝采の輪は、5週連続トップ10入りしたオランダとドイツ、初登場1位を獲得したスイス、そしてベルギーと、ヨーロッパ各国まで広がっていった。原案はアメリカでも6週トップ10入りの大ヒットを記録したメキシコ映画で、既に世界5ヶ国でリメイクが決定している。

◆また、公式HPのストーリーは次の通りだ。

南仏コートダジュールの海辺の町で、観光客を乗せるヨットの仕事をしながら、毎日がバカンスのような気楽な暮らしを送るサミュエル(オマール・シー)。そんなある日、かつて関係を持ったことすらよく覚えていない、クリスティン(クレマンヌ・ポエジー)と名乗る女性が現れ、生後3か月の赤ん坊を「あなたの娘、グロリアよ」とサミュエルに託していく。慌てたサミュエルはクリスティンを追ってロンドンへと向かうが、とある事情から心に傷を負い、子育てにも自信を失くした彼女は、どこかへ消えてしまう。

言葉も通じない異国で立ち往生、財布を落として全財産を失くしたサミュエルを救ったのは、彼にひと目惚れしたゲイのベルニー(アントワーヌ・ベルトラン)だった。TVのプロデューサーのベルニーは、サミュエルにスタントマンの仕事を斡旋し、一人では広すぎる家にグロリア共々居候させてくれる。

それから8年、グロリアは明るくたくましく聡明な少女に成長し、スタントマンとして大成功を収めているサミュエルの優秀なマネージャーとして、しょっちゅう学校を休んでは、撮影現場に同行していた。もはや娘というよりも、サミュエルの立派な相棒だ。二人を支えてきたベルニーは、未だ恋人募集中ではあるが、グロリアのおじのような存在として絶大な信頼を得ている。3人はあらゆる意味で“普通じゃない”家族になっていたが、誰よりも幸せいっぱい家族でもあった。

◆ミュージックと女好きでお気楽なプレイボーイから、180度転換して理想的な子育てパパへ！よくまあ、そんな変身ができるものだ、と感心する本作の前半は、バカバカしいながらほほえましい限り。スタントマンとしてあんなにリッチな生活をしながら8年間にあんなに良好な父娘関係を築けたら、そりゃいいものだ。そんなサミュエルの努力にも大きな拍手を送りたい。

◆ところが、そこに8年前のクリスティンが「私がママよ」と登場し、子供を引き取りたいと言ってきたから、アレレ・・・。そりゃないだろうと思っていたが、クリスティンはかなりしつこい。そして、サミュエルのOKがとれないことがわかるや、なんと今度は弁護士を立てて「親権をよこせ」の裁判をやってきたからビックリ。おいおい今更それはないだろう、と思っていたが、映画は中盤以降、なんともシリアスな裁判モノ(?)に急転換！

◆本作が「裁判モノ」といえるほど、本格的な「裁判モノ」でないことは、法廷シーンのいい加減さを見ればよくわかる。もっとも、こんな裁判長で大丈夫かなと心配していたが、意外に話のわかる裁判長だったようで、判決は無事サミュエルの勝ち。控訴審がないのも不思議だが、それはそれとして「これにて無事解決」となったのでは映画としては全然面白くない。そこでクリスティンが最後に持ち出した武器は、父子関係のDNA鑑定の申し立てだ。

日本でも、今年の春ごろは、元光GENJIの大沢樹生が、女優・喜多嶋舞との間に設けた長男に関してDNA鑑定をした結果、「2人が親子である確率は0%」という鑑定結果が出され、家庭裁判所はそれに基づき「親子関係なし」の判決を出した。弁護士の考えれば、それと同じようにいやそれ以上に、本件では父子関係の存否が怪しいことは最初からわかっているのだから、親権の争い以前に父子関係の鑑定が必要なのは当然。しかして、実施されたDNA鑑定での結果は如何に・・・？その結果如何では、サミュエルはグロリア(グロリア・コルストン)の親権を失うことに・・・？

◆クリスティンはかなりの美人だから、冒頭シーンの身勝手さや、8年後の「親権を寄せ」と要求しての再登場もある程度許せるが、親権の裁判で敗訴した後、DNA鑑定の申

請をしてきたところからはもはや許容範囲を逸脱！この女は一体何だ！と思ってしまう。しかし、いくらそう思っても、鑑定は鑑定。子供の引渡しに警察官がついてくるというイギリスの法制度には驚いたが、そんな警護つきの子供の引渡しの強制執行にグロリアとサミュエルが任意に応ずれば、それにてジ・エンド。それはわかっているが、それでは映画としては面白くない。そこで本作が見せるラストのクライマックスは・・・？

◆サミュエルを演じたオマール・シーは『最強のふたり』（11年）は新鮮味があって、彼が演じたスラム街育ちの黒人青年とフランソワ・クリュゼが演じた下半身が麻痺した大富豪との掛け合いが面白かった（『シネマルーム29』213頁）。本作でも、サミュエルと8歳の少女グロリアとの掛け合い、そして意外にイギリスにもゲイが多いことを思い知らされた本作におけるサミュエルとベルニーの掛け合いは、それなりに面白い。しかし、何と言ってもストーリーテキングがイマイチだからこの手の映画はもう見飽きた感が・・・。

2017（平成29）年9月22日記